秋草

いつしかに樫の裏葉に風光り尾花がわかく穂を出しけり
しろがねのもたひにさせる秋草の花紫にゆるぐ朝かな
月明き夕あかつき哀れなり露に亂るゝ秋の花草
ほのかなる朝の風にゆら〳〵と身丈のかぎりゆらぐ水引
病む人が白きしとねに端然と秋の草見る美しさかな
はかなげに異なるさまもなくて咲く水引草を好みそめにき
茅屋根の上に露草みだれ咲く家あまたあり初秋の村
燈籠の光の淡く秋萩のしげみを照らす夜のかなしさ
秋の野に咲ける花草手折れどもかざさで捨つる淋しき女
淡あかく尾花のならぶ細道に今日も夕陽を見に出でにけり
おほらかになみ立つ尾花さんらんと光れば午後の野邊の冷たき

L.

秋の鳥

秋の森君は眼を閉ぢ木によりて鳥の音をめで動き給はぬ

T.

秋の鳥なく日となれば出つといふ我が病に涙ぐまるゝ
小鳥來て御寺の庭の木犀を金砂の如く散らす朝かな
秋雨の眞晝淋しき鳥小屋の塀かたぬれて小鳥なかずも
むら雀榛の並木にわたり來て秋の夕陽に染まる靜けさ
秋の日のうすきに光る河原道小石渡りてとぶ千鳥かな
町に居ればすゞかけの實をけちらして小鳥のなくも嬉しかりけり
我のごと淋しかるらむ小鳥らは日毎葉のちる木を宿として
秋來れば事なき鳥の聲にだに遠き思のある心地する
九官鳥君が名呼べばこたへする秋の廊下のものゝ淋しさ

L.

夕の庭

ものゝかげうらはかなげに消えて行く夕の庭に萩の花散る
美しき秋のすがたをさやかにも水にうつしてたてる山かな
紅葉ばをひろひてゆかむこの山の今日を限りのわすれかたみに

S.

行く末のあはれもかねてしられけり桐の葉さそふ初秋の風

紅の入日を見ればつく〴〵と海のあなたのこひしかりけり

ひた〳〵と灰色の波さゝやける海邊に來てはものをこそ思へ

故しらず物思ふ身となりにけり庭のすゝきの穂に出てしより

たま川のつめたき河原の砂の上にいこひてあれば秋の風吹く

月見ると尾花が間よりさしのぞくわか妹のおとなびやうよ

尾花咲く岡の上今日もわれ一人赤き夕陽にむかひて立ちぬ

わか命消ば消えよと秋草のうつくしき野にまろびねしかな

賤の女が大根をあらふ里川に紅葉ながれて秋はくれ行く

秋草をしきてすわりてしみ〴〵と女心のはかなさ思ふ

青空と峰のもみじのてりはゆるしぐれの後の秋の山かな

おくつきにさふけんとては植ゑざりし垣の白菊露おもげなり

露ふかみ訪ふ人もなきわが宿の庭の萩原花咲きにけり

さびれたる心の如き色見せて落葉はしきぬ秋の山路に

旅の子の父母戀ひて泣くがごとかろきおのゝきみする糸萩

穂に出でしすゝきや何をおそるらむ風もなき夜にさゆらぎをする

龍膽のうらがなしげにさけるあり秋の日ざしの冷き山路

思ふまゝしけれる野邊の萱原にまじりて咲けるなでしこの花

うらがれのさびしき姿ほの見せてくれなゐもゆる秋の山かな

咲きのこる垣の朝顔色あせてかなしきものを秋風の吹く

端居して文よみながらほす髪をさら〳〵と吹く秋風のよさ

ほろ〳〵とこぼれてあはれ女郎花つとに手折らむ術もあらなく

しつとりと露にそぼちて竹垣によろぎかゝれる白萩の花

青々とすみわたりたる大空に高くも立てる秋の山かな

こともなく秋風に散る櫻葉に見入りてあれば涙こぼれつ

日ねもすを小暗き室にもの思ひ秋の日和も知らぬ我なり

秋霧のましろき中に藤はかま一むらさける靜かなる朝

五ひらの花の形は星に似てみ空の色に咲ける桔梗

ことぶきのためしにひかるきくなからうつろひゆきぬ一日二日に

コスモスの花つみとりてくちにあてわか思ふことさゝやきて見る

萩見ても尾花を見てもかなしかりわがわかき日のゆかんとすれば

まちを行く人のさゝめきしつまりて短き夏の夜はふけぬらし

潔よきいけにえなりとほゝゑめる友のひとみに涙見えけり

木々の葉のうすもみぢせるうれしさに早くもきつる山のいたゞき

以下四首　粟州

山かげの楢の小林あきさればこの多くなり遠き瀧見ゆ

紅葉ちる二荒の山の夕くれに心しみ〳〵秋をおぼゆる

小春日のくれ行く海の遠ち方に灰色の帆の見ゆるほのかさ

波もなき秋の夕の入海にひゞく櫓の音きくはわひしも

身の儘に

千葉安良

身の儘に振舞はざるをたふとくも思へど時に物ぞ足らはぬ

淋しさとその悲しさを祕めもちて笑ひてあれば心やすかり

いと高きかの悅びといと深きこの悲しみと胸にあふるゝ

かの歡喜この哀愁ぞ我が生くる力のもとよあはれはかなき

はかなしと思ひ果つべくあまりにも尊く人の世の見ゆれども

いと輕うをかしき方にもの事を見なし振舞ひすぐすよろしさ

教養のゆたけきさまの人々にむかひてありし淡きよろこび